

## リレー・エッセイ（第2回）

### 聖史劇の名称としての「サイクル劇」

末松良道

中世末期のイングランドの演劇には、大きく分けて、聖書の物語を上演する聖史劇、死を前にしての魂のあり方を問いかける道德劇、そして聖者の生き方や聖体の奇跡などを扱う聖者劇などがある。これらの劇のジャンルに付けられてきた名称は、それぞれの劇を定義し、それらの内容に深く関わるので、安易には扱えないが、しばしば使われる名称である ‘mystery play’、‘cycle play’、‘morality play’ 等々は19世紀以降の学者が使い始めたもので、上演当時の人々が使っていたわけではない。昨年、私は学会発表の原稿を書いている間、イングランドで写本が残った4つの主要聖史劇（ヨーク、チェスター、タウンリー、Nタウン）をどう呼ぶか、という問題がずっと気にかかっていた。これまでの論文や研究発表の原稿では、度々「ヨーク・サイクル」や「タウンリー・サイクル」と書き、あるいは、聖史劇のジャンルを表す名前（a generic term）として「サイクル劇」（cycle plays）という表現を使用した。しかしこの名称は4大聖史劇全体を示す言葉としては近年あまり使われなくなってきた。権威者による研究の総括として広く参照されている1994年刊の Cambridge Companion to Medieval English Theatre を見てみると、ヨーク、チェスター、タウンリーに関する章のタイトルでは、‘cycle’ という名前が使われているが、Nタウンでは、「Nタウン劇」（The N-Town plays）という名称になっている。更に、2008年に出たこの本の第2版では、「タウンリー劇」の章も、初版と同じ筆者、ピーター・メレディス（Peter Meredith）の執筆だが、「タウンリー・ページェント」（The Towneley pageants）という名称に変更されている。更に「ヨーク劇」についての章でも、筆者で本全体のエディターでもあるリチャード・ビードル（Richard Beadle）は、「ヨーク・サイクル」（The York cycle）というタイトルから「ヨーク・コーパス・クリスティ・プレイ」（The York Corpus Christi Play）へ変更している。「サイクル

劇」という名称の背後にあるアイデアそのものが学問的に使いづらくなっている証拠だろうか。

中世劇研究における‘cycle’という言葉は19世紀の学者達を使い始めたと思われるが、キリスト教から見た天地創造から最後の審判までの世界と人類の歴史の一巡、つまり「サイクル」を、数多くの短い劇を連ねて上演するのでこのように呼ばれる。演劇やロマンスなど古代・中世の文学作品の記述におけるこういう‘cycle’の使い方は、OEDによると1835年の例が最も早く、中世や近代初期の上演当時から使われたわけではない。4つの聖史劇の中では、ヨークとチェスターに伝わる聖史劇は、14世紀、あるいは15世紀の上演開始からおそらくサイクル形式を取っており、サイクルを形作る多くの短い劇は職能組合（trade guilds）が担当していたという記録が多く残されている。従って、この2つの劇、あるいは劇のグループは「ヨーク・サイクル」、「チェスター・サイクル」と呼んで問題ないだろう。

一方、「タウンリー劇」と「Nタウン劇」はかなり事情が異なる。「タウンリー」（Towneley）という名称は写本に付けられた名前だが、遅くとも17世紀には唯一現存する写本を所有していたランカシャーのジェントリー、タウンリー家に由来する。この写本に集められた劇は、大まかに言って天地創造からキリストの受難を経て最後の審判までの人類の歴史をたどっており、サイクル形式を取っている。しかし、実際にこの写本がそのままの形で上演に使われたり、あるいは、実際の上演を記録しているという証拠はない。

「タウンリー劇」は長らく「ウェイクフィールド・サイクル」（‘Wakefield Cycle’）とも呼ばれており、かつてはその呼び名のほうが主流だった。ウェイクフィールドは中世にはマーケット・タウンとして知られたウェスト・ヨークシャーの町で、そこで何らかの宗教劇を上演していたことが記録から分かっている。また、「タウンリー劇」の作品にはウェイクフィールド、およびその周辺に固有の地名が幾つか出てくるので、この写本の劇がウェイクフィールドで上演されたと考えられるようになった。しかし、ウェイクフィールドで行われた実際の上演がタウンリー写本に基づいているという決定的な証拠はないようであり、権威者達も「ウェイクフィールド・サイクル」という名前を避けるようになった。この写本が実際の上演に関連していないとすると、一種のクロゼット・ドラマ（読むための演劇脚本）として編纂されたと考えることも出来る。タウンリー写本にはヨーク劇と共通の台詞を含んだ劇が5つ収められており、これらの劇に関しては、可能性として、いずれか一方の写本の

写字生が他方の写本を参照したか、あるいはヨークとタウンリー写本の双方が現存していない共通のソースとなる写本に依拠しているかであるが、ピーター・メレディスは後者であろうと論じている。いずれにせよ、少なくともこれら5つの短い劇とその他の劇は違った作者が書いた可能性大である。そうすると、タウンリー写本は2つ以上のソースからなる複合写本であり、名称としては、写本ベースでは「タウンリー・サイクル写本」と言えそうだが、「タウンリー・サイクル」と呼ぶべき演劇作品が存在したかどうか、異論が残るだろう。それでも、タウンリー写本に収められた劇にはかなりの統一感があり、編纂者（達）がまとめるにあたり、かなり手を入れて首尾一貫した「サイクル」となるように体裁を整えたという印象を与える（その編纂者のひとり、リアリスティックな表現と特徴ある詩形から「ウェイクフィールド・マスター」という名を与えられている）。

一方、「Nタウン劇」の場合は複合写本であることがより鮮明だ。写本全体の中でクライマックスと言える2つの受難劇の脚本は他の劇に比べて大変長く、また多くの俳優とかなり広い固定舞台を駆使した大規模な上演が意図されていて、その他の短い劇とは別の出自を持っていることは素人にも分かる。他にも、5つの短い劇（あるいは、5つのパート）に分けられた「マリア劇」や元々独立した作品として書かれたと思われる幾つかの劇もあり、各々の劇は大変興味深い、全体的な統一性には乏しい。従って、これも一応「サイクル」形式を取った写本ではあるが、「Nタウン・サイクル」と呼ぶのはためらわれる。更に、「Nタウン」（N-town）のNは‘nomen’の頭文字であるとも考えられ、上演される町の名前をそこにに入れるための空欄のようなものかもしれない。つまりこの劇は、特定の上演地が分からないのは勿論のこと、そもそもこの写本に基づいた上演が現実にあったのかどうかさえ不確かなのである。

こうして見ると、前述のようにヨークとチェスターについては、「サイクル劇」と呼ぶのがふさわしいし、細かく分けられたパートからなる1つの長大な劇として鑑賞する事も可能だが、「タウンリー劇」と「Nタウン（写本の）劇」（あるいは、劇の集まり）は様々な劇のアンソロジーであり、「サイクル劇」と呼べるのか疑問だろう。

#### 関連書籍案内

イングランドの聖史劇のアンソロジー：

*English Mystery Plays: A Selection*, ed. by Peter Happé (London: Penguin)

Books, 1975).

*Medieval Drama: An Anthology*, ed. by Greg Walker (Oxford: Blackwell, 2000).

上記 Happé のエディションに基づく日本語訳のアンソロジー：

石井美樹子 (訳) 『イギリス中世劇集 —コーパス・クリスティ祝祭劇—』  
(篠崎書林、1983)

イギリス中世・チューダー朝演劇全般に関する該博な事典：

松田隆美 (編) 『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』 (慶應義塾大学  
出版会、1998)

上記の事典出版以降の研究も踏まえた優れた研究案内：

土肥由美 「劇 Drama・Play・Theatre」 高宮利行、松田隆美 (編) 『中世イ  
ギリス文学入門 — 研究と文献案内』 (雄松堂出版、2008) pp. 193-204.

\* 写本のファクシミリを含め、更に詳しい文献紹介は、上記 Walker や松田、土肥  
を参照。

中世演劇研究の代表的な学術誌：

Medieval English Theatre (The Medieval English Theatre Society) [http://  
medievalenglishtheatre.co.uk](http://medievalenglishtheatre.co.uk)

Early Theatre <https://www.earlytheatre.org>

\*\*\*\*\*  
エッセイに関するご意見・ご感想お待ちしております。